

ホメーロスの涙

生田康夫

はじめに

『イーリアス』で最初に涙するのはアキレウスである。その場面は第一歌中程に出てくる。自らが受けた屈辱を母女神に訴える場面だ。最終の第二十四歌でもアキレウスは泣いている。これは全く別の涙で、敵であるはずの老王プリアモスと共にする涙だった。『オデュッセイアー』においても、オデュッセウスの妻ペーネロペイアは勿論、オデュッセウス自身、息子テレーマコス、父ラールエルテースと、泣かない者はいない。

ホメーロスの詩篇は悲しみに満ちている。無論『イーリアス』において主題は「怒り」だったし、また「笑い」は『イーリアス』にも『オデュッセイアー』にも様々な形で登場する〔註1〕。このようにホメーロスの詩篇には喜怒哀楽すべての感情がないわけ

ではない。しかし「悲しみ」は特に両詩篇全篇に充ち満ちているとの印象がある。

ホメーロスにおける悲しみの内容や現れ方、捉え方はどのようだろうか。それは現代の我々の悲しみの場合と共通するのだろうか、相違するところがあるのだろうか。そして、詩人は何故これほどまでに悲しみを歌ったのだろうか。

これらの問いを念頭におきつつ、テキストに就いて詩人が悲しみをどう描いているのかを見ていくことにしたい。

A. 涙

悲しみのもっとも端的な表現は涙だ。ホメーロスにおいても多くの涙が流されている。「流す *κείν*」のみではない、「滴

らせ εἶβω」 「放ち ἵμυ」 「っほし βάλω」 「湧き出させる
ἀναρπύβω」。

A— a 涙が濡らすもの

さてその涙は何を濡らすのか。

先ず「頬」である。

伶人が語るトロイア遠征譚を聴きオデュッセウスは涙して頬
を濡らす。

それを高名な伶人が歌うとオデュッセウスは打ちしおれ、
涙は臉の下、頬を濡らした (『オデュッセイア』第8歌

521・522)

予言者テオクリュメノスは求婚者達の頬が濡れるのを予見す
る。

嘆き声は燃え上がり頬は涙に濡れている (『オデュッセイ

ア』第20歌353)

原文は

οἰμωγῇ δὲ δέσῃ, δέδουκνυται δὲ παρειαί,

であり、反復される「de」音が不気味な音調を奏でている。

勿論「顔」も濡らす。

老女エウリュノメーは人前に出ようとするペーネロペイアに
こう勧める。

そのようにお顔を涙で濡らして出るものではございません、
際限なく嘆くのはよくないことですから (『オデュッセイ

ア』第18歌173・174)

そして「衣」も濡らす。

オデュッセウスが自らの漂流譚を語る中にこうある。

そこに七年間ずっと留まった、衣は常に涙に濡れていた、
カリユプソーが与えてくれた不滅の衣は (『オデュッセイ

ア』第7歌259・260)

そして「懐」。

メレアグロスの物語、兄弟を殺されて復讐を祈願するメレア
グロスの母は懐を濡らす。

地にひざまずいて(大地を叩いた)、懐は涙で濡れた (『イー

リアス』第9歌570)

日本の伝統でこの「衣」や「懐」に近いのは「袖」だろうか。『註』

戦場においては「砂と武具」だ。
死せるパトロクロスを前に仲間達は涙する。

砂は濡れた、者共の武具も涙で濡れた。それほどまでに潰
走の引き起こし手たる勇士を偲んだのだ（『イーリアス』
第23歌15・16）

戦争叙事詩ならではの詩行だ。〔註3〕

女性にあつては「臥所」である。
ペーネロペイアは悲嘆する。

臥所に寝に行きましょう。そのいつも私の涙で濡れている
臥所は嘆きに満ちています、オデュッセウスが名を言うも
忌まわしいイーリオスへと赴いて以来（『オデュッセイア』
第19歌595〜597）

日本の伝統では「臥所」が「枕」をもって象徴されている。〔註4〕

A—b 涙を隠す

涙は意志の如何にかかわれず自然に流路するものだ。その涙
を隠そうとすることがある。

このように言つて父親に対する彼の悲嘆の思いを掻き立て
た。彼は父親についての話を聞きつつ臉から地面に涙をこ
ぼした、両手で紫の衣を眼の前にかざして。だがメネラー
オスはそれに気づいた（『オデュッセイア』第4歌113〜
116）

テレマコスがメネラーオスによる父オデュッセウス追憶談
を聞いて思わず涙した場面、隠そうとしたが相手に気づかれた
ところだ。

次はそのオデュッセウスが伶人の歌うトロイア遠征譚を聞く
場面である。

高名な伶人はそれを歌った。オデュッセウスは 紫の幅広
きマントを頑丈な手で引き頭からかぶり麗しい顔を隠した。
眉の下に涙を流すのをバイエーケス人達に恥じたのだった
（『オデュッセイア』第8歌83〜86）

「恥じたのだった」と隠した理由にも触れている。やはり勇
士は涙を恥としたと見える。「頑丈な手で」に勇士のむせび泣
く姿が浮かぶ。

さてそのオデュッセウスが自らの館に帰還し、愛犬アルゴス
と対面したときにはこうだった。アルゴスは老犬で衰弱しきつ
ており、実際この直後息絶える。

そこに犬のアルゴスは横たわっていた、虱にまみれて。その時、近づいてくるオデュッセウスを認め尻尾を振り両耳を垂らしたが、もう主人のもとに近づくことはかなわなかった。彼（オデュッセウス）は目を逸らせて涙を拭った、エウマイオスの目をたやすく盗んで……（『オデュッセイア』第17歌300～305）

犬好きには、否犬好きでなくとも、思わず涙を共にしかねない一節だろう。

隠した相手は忠僕エウマイオスではあるが、彼にもオデュッセウスはまだ身分を明かしていないのだった。

A | c 涙をこらえる

涙が流れそうになったとき、流れる前にそれを意志によって押しとどめようとすることがある。

一方オデュッセウスは嗚咽する妻を心の中で憐れんだ。両眼はあたかも角か鉄の如くに瞼の中で不動であった、彼はそうして巧みに涙を隠した（『オデュッセイア』第19歌209～212）

完全にこらえ得たかどうかは明らかでない。眼を見張って必死に涙腺をゆるめまいとする様が「角か鉄の如くに」に表れて

いる。

A | d 涙する馬

涙は人間特有のもの、人以外の動物は涙することはないと言われる。ホメーロスではしかし、涙する馬がいる（もつとも、この馬は神馬であり人語も話し得るくらいだから異とするにたぬとすべきか）。

二頭（の馬）は広いヘーレスポントス海の船へ戻ろうとせず、アカイア勢の戦いの場の方へ戻ろうともしなかった。あたかも墓標の如くに身じろぎもせず動かなかった。その墓標とは亡くなった男か女の墓に立っているものだ。その如くに麗しい車を付けてじっと立ちつくしていた、頭を地に垂れ、悲しむ二頭の熱き涙は瞼から地面に流れた、駆り手を偲んで。豊かな鬣は塗れた、頬当てから軛に沿って両側に垂れ下がって（『イーリアス』第17歌432～440）

「豊かな鬣は塗れた」とされている。地面の土が涙によって泥と化しそれに塗れるのだろう。塗れるのが鬣であるところに馬の悲しみが出ている。

A | e 神は涙するか

オリュンポスの神々は人間的である。では彼の神々は涙する

ことはあるのか。稀だがないわけではない。アキレウスの母神テティスとアルテミスの例があった。アルテミスの例を挙げよう。トロイア方に加勢したことで女神ヘーレーに打擲されたときだ。

涙しつづ女神（アルテミス）は鳩の如くに身を屈めて逃げ
ていった（『イーリアス』第21歌493）

オリュンポスの神々において「神の血液^{θεογονία}」は人間の血とは異なるとされているから、あるいは涙もその成分は異なるのだろうか。

A—f 悲しみの涙と喜びの涙

涙には喜びの涙もある。悲しみの涙と喜びの涙、この二つが引き続いて起こり対照されている場面がある。オデュッセウスが危険を冒して妖女キルケーの下に赴く。その生還を部下達はほとんど絶望しつづ待ち受けている。そこにオデュッセウスが戻ってくる。

（オデュッセウスは）速き船と海辺へとやつてきた。する
と速き船のところで忠実な部下達が大量の涙を流して哀れ
に嘆き悲しんでいるのを見た（『オデュッセイアー』第10
歌407～409）

これは悲しみの涙だ。そして一転喜びの涙に変わる。

あたかも田舎の仔牛達が、牧草に飽いて小屋に帰ってくる
群なす牝牛たちを迎えて囲み、皆跳びはねる、最早柵は隔
て得ない、しきりに啼きながら母親達の周りを跳ね回る。
その如くに彼らは私を目に認めるなり涙しつづ縋り付いて
きた（『オデュッセイアー』第10歌410～415）

悲しみの涙と喜びの涙が同じ涙であるのは考えて見れば不思議なことだ。先に人間と神々との間の涙の差異如何についてふれたが、同じ人間の悲喜二つの涙の間には色や味、成分に果たして差異はないのだろうか。

A—g 涙の比喻

涙は何に喩えられているか。

黒き水の泉の如くに涙を流しながら立ち上がった（『イー
リアス』第9歌14）

黒き水の泉の如くに熱き涙を流しながら傍らに立った
（『イーリアス』第16歌3）

前者はアガメムノーン、後者はパトロクロス。「黒き水の
μελανυδρον」とは印象的だが、どのような水、どのような状

態の水を指しているのか。前者なら横暴でずる賢いところのあるアガ멤ノンが流すのだから「腹黒さ」を表しているのかとも思われるが、後者は「生前は皆に優しくあることを心得ていた」『イーリアス』17-671、2)といわれるパトロクロスでありそれは相応しくない。この「黒」はどうも人格評価ではなく色そのものであろう。湧き水の「水影暗き」様かと思われる。

A—h 涙の形容を冠する言葉

では逆に涙は何を形容しているか。

πολύδακρυον ἄφρα 涙多き軍神アレース(の戦い) (『イーリアス』第3歌132)

リアス』第3歌132)

πόλεμον πολύδακρυον 涙多き戦争 (『イーリアス』第3歌165)

歌165)

μάχης πολύδακρυον 涙多き戦闘 (『イーリアス』第17歌192)

歌192)

θύμην / … πολύδακρυος 涙多き合戦 (『イーリアス』第17歌543・544)

第17歌543・544)

成る程、「戦い」ほど多くの涙を流させるものはあるまい。

上記はいずれも『イーリアス』の例だ。では『オデュッセイア』に「πολύδακρυος 涙多き」の形容は果たしてあるのか。確かめてみると、あることはあるが『イーリアス』の様に形容されるの

は「戦い」ではない。三箇所あっていずれも

πολύδακρυότοιο γόοιο 涙多き悲嘆 (『オデュッセイア』

第19歌213)

の如くに「 $\gamma\omicron\omicron\omicron$ 悲嘆」を形容である。こんなところにも両詩篇の肌合いの相違、世界の相違が現れている。

B. 悲嘆の仕草

「涙」は悲嘆のもっとも端的な発露である。しかし、人間において悲嘆の表現・仕草はそれに留まらない様々な形で現れる。

B—a 髪を引きむしる

身体の上の方から、先ず髪だ。

ヘカペーは遺体となって地面を引きずられる息子ヘクトールを見ていたたまれなくなる。

母親は髪の毛を引きむしり艶やかな被り物を遠くに投げ、我が子を見て大で泣きじゃくった (『イーリアス』第22歌405-407)

B—b 頭を叩く

そして頭を叩く。髪を引きむしるのも頭を叩くのも、そして後に続く身体を痛める仕草は全て一種の自傷行為だろう。

老人は呻き手を振り上げて頭を叩いた、そして呻きつつ大声で叫んだ（『イーリアス』第22歌33～34）

B—c 頬を掻きむしる

戦死した猛将プロテシラーオスの妻についてこう言われる。

彼の両頬を掻きむしる妻がピュラケーに残された（『イーリアス』第2歌700）

因果関係を時系列的に言えば「妻は残されて両頬を掻きむしることになった」のだがそれを「両頬を掻きむしる妻が残された」と表現している。「両頬を掻きむしる」以外にあり得ない妻の宿命を感じさせる。そして、「両頬を掻きむしる」は *phōphōphō* という一語の形容詞だ。そのような形容詞が存在するということはそのような宿命にある女達が他にもいたであろうことを物語っている。

勇士ディオメデースは言う、俺が狙った奴、

そいつの妻の両頬は掻きむしられることになる（『イーリ

アス』第11歌393)

と。「妻が」掻きむしるのではなく「妻の両頬は掻きむしられる」と「両頬」が主語となっている。これも容赦ない必然を表した表現のようだ。

B—d 喉を切り裂く

アキレウスは僚友パトロクロスの戦死の報をアンティロコスから聞く、その直後の様はこう語られる。

一方アンティロコスはアキレウスの手を掴みつつ涙を流して号泣した。彼（アキレウス）は誉れある心に呻いていた。（アンティロコスはアキレウスが）喉を鉄で切り裂きはしなかつた（『イーリアス』第18歌32～35）

実際に「切り裂いた」わけではないが「切り裂きかねなかった」のだ。涙しているアンティロコスも必死である。主語が目まぐるしく入れ替わっているところにも状況の切迫が感じられる。

B—e 胸を叩く

叩くのは頭だけではない。同じくパトロクロスの死を知った女達の仕草はこうだった。

アキレウスとパトロクロスが捕虜にした女召使い達も心に悲しんで泣き叫び、勇武のアキレウスのまわりに走り出て来ると、皆手で胸を叩き足は萎えた（『イーリアス』第18歌28～31）

悲しみの仕草として胸を叩く文化は世界にどれだけ普遍的なものなのだろうか。日本ではあまり見られないようだ。〔註5〕

B—f 胸、首、顔を掻きむしる

むしられるのも髪だけではない。

パトロクロスの遺体を前にしたブリーセイイスはこのように語られる。

彼のところに倒れ伏し泣きじやくり手で掻きむしった、胸を、柔らかな首を、そして美しい顔を（『イーリアス』第19歌284・285）

B—g 腿を叩く

腿も叩かれる。自分の息子の死を知ったアレースは腿を叩く。

このように言った、するとアレースは手の平で遅しい腿を叩き嘆きつつ言葉を洩らした（『イーリアス』第15歌113・

114）

また、目覚めたオデュッセウスが、実は故郷イタケーに帰っていたのだがそれと気づかず、またしても別の異境に着いたと思つて腿を叩く。

彼は跳び起きて故郷の地を見やった。そして手の平で自らの腿を叩き嘆きつつ言葉を洩らした（『オデュッセイアー』第13歌197～199）

いずれも「嘆きつつ」(ὀδυρόμενος)とあり、深い悲嘆にとらわれた時の仕草だ。〔註6〕

B—h 膝と心がくずおれる

ペーネロペイアは息子テイレマコスが求婚者達に待ち伏せされて殺されようとしていると聞く。彼女の膝と心は崩れる。

このように言う、たちまち彼女の膝と心はくずおれた（『オデュッセイアー』第4歌703）

ホメーロスにおいて「膝」は生の根幹に繋がるものをなしていたようだ。〔註7〕

ある時は脇腹を下に、ある時は仰向けに、ある時は俯せに。
そしてまた起き上がって海の浜辺をさまよい歩いた（『イー
リアス』第24歌10～12）

B—m 灰をかぶる

このように言った。すると彼を悲しみの黒い雲が覆った。
彼は黒ずんだ灰を両手で掴み頭から被って美しい顔を穢し
た（『イーリアス』第18歌23～27）

パトロクロスの死を知ったアキレウスだ。

同様の詩句が息子オデュッセウス死すと思ひこんだラーエ
ルテースに対してある。

このように言った。すると彼を悲しみの黒い雲が覆った。
彼は黒ずんだ灰を両手で掴み激しく呻きながら白髪の前か
ら被った（『オデュッセイアー』第24歌315～317）

「黒ずんだ灰」で穢されるのはアキレウスの場合の「美しい顔」
に対してラーエルの方は「白髪」だ。

ところで前者のアキレウスの場合悲嘆の原因（パトロクロ
スの死）は現実であったが、後者のラーエルの場合の原因
（オデュッセウスの死）は事実ではなかった。その事実でない

ことを思い込ませたのは旅人に扮した他ならぬオデュッセウス
本人なのだから罪作りだ。オデュッセウスはすぐに名乗ること
をせず、オデュッセウスの悲運を思わせる作り話をしたのだった。
何故あつてわざわざ親を悲しませるのか。『オデュッセイアー』
の謎めいたところだ。

直前に

剛毅な貴いオデュッセウスは老いに衰れ、胸に悲しみを抱
いた彼を見て高い梨の木の下に立って涙を流した（『オ
デュッセイアー』第24歌232～234）

と、年老いた父の姿を見て涙したオデュッセウスなのだから
ますます謎は深い。

B—n 汚物に塗れる

灰ではなく汚物に塗れることもある。

（ブリアモスは）マントで身体をすっぽりとくるんでいた。
その老人の頭と首の周りには汚物がべつとりと付いていた、
それはふしまろんで自らの手で塗りつけた汚物だ（『イー
リアス』第24歌163～165）

ヘクトールの死を哀哭するブリアモスである。

C・悲しみの比喩

悲しみの様を叙する時、詩人はどのような比喩を用いているのだろうか。

C—a 少女

先ず、涙ながらにアカイア勢の危機を訴えようとするパトロクロスの姿が母親に縋る少女に比される。話者はアキレウスだ。

何故涙しているのだ、パトロクロスよ、あたかも幼い女の子の様に、母親の後を追って走り抱き上げてくれといってその着物に縋り付き急ぐ母を引き留める、そして涙ながらに母を見つめる(そんな女の子の様に) (『イーリアス』第16歌7～10)

このシーンなどは現代でも世界中の路上で目にしそうな風景だ。「着物に縋り付きstavou, artoleitai」はまさしく「袖に縋る」だ。このようなときの少女の仕草、眼差しに古今東西差異は無い。

C—b 獅子

今度はパトロクロスを喪ったアキレウスの悲嘆の様が子を奪われた獅子のそれに比される。

獅子も我が子については悲しむ。

あたかも鬣よき獅子の如くにしきりに呻きながら、深い森からその獅子の仔を鹿狩りの狩人が奪い取る、獅子は後に来て悲しみ、狩人の足跡を探して見つかりはせぬかと数多の谷間を行く、激しい怒りが取り付いているのだ。あたかもその如くに深く呻きながらミュルミドーンの者達に言った (『イーリアス』第18歌318～323)

「鬣よき獅子」(βιήλυκος)の像が「猛者アキレウス」の像に見事に重なる。

C—c 戦死者の妻

伶人の歌うトロイア戦役譚を耳にしたオデュッセウスは思い出に涙する。その様が戦死者の妻の姿をもつて語られる。

あたかも女が我が夫のもとに倒れ伏して泣くが如くに、その夫は自分の城と軍の前で斃れたのだ、町と子供達を容赦ない日から護らんとして。女は喘ぎ死んでいく夫を見てそのもとに崩れ落ちて鋭く泣きじゃくる。敵が後ろから槍で背と肩をつつき苦難と悲嘆の待つ隷従の境涯へと連れ去っていく。彼女の両頬はこの上なく哀れな悲しみにやつれ果てる。その如くにオデュッセウスは哀れな涙を流した。(『オデュッセイア』第8歌523～531)

この比喩は「戦争の辛苦を追憶する悲しみ」を「戦争で辛苦を蒙る妻の悲しみ」で喩えるものであり、いわば「つきすぎ」だ。よき比喩の要件である飛躍がなく、精彩を欠くとも見られかねない。しかし、この比喩には別の見所がある。比喩の中に出てくる戦死者の妻には、他ならぬオデュッセウス自身の活躍によって攻略されたトロイアの人（就中ヘクトールの妻アンドロロマケ）の傍がある。そこに運命の皮肉がある。

C i d 子を喪った鳥

ペーネロペイアは自らの嘆く様を夜鶯の鳴き囀る様に喩える。夜鶯は子を喪った母親が変じたものとされている。しかしその子は奪われたのではなく母自らが誤って殺めたのだった。

パンダレオスの娘、黄緑の夜鶯 *anōvān* が春立ち初める頃木々の繁る葉陰に止まって美しく歌う *aeiōvān* ように、その夜鶯は様々に節を変えながら響く声音を降り注ぎます、かつて誤って青銅で殺めたゼートス王との間にもうけた我が子イテュロスを嘆きながら（『オデュッセイアー』第19歌 518～521）

この一節はことに哀調を帯びている。

「夜鶯 *anōvān*」は「歌う *aeiōvān*」と共鳴して *aeōvān*。〔註8〕

また 519・520 の二行

春立ち初める頃美しく歌う
木々の繁る葉陰に止まって

kalōn aeiōvān ēkros yēon isotatēvōio,
devdēvān ēv perāloioi katētoimēvη pukivōioi,

で繰り返される「o」はむせび泣く声にも聞こえる。

C i e 融雪

ペーネロペイアに対して、乞食に身を糞したオデュッセウス自身がオデュッセウスと出会ったことがあるとの作り話をする。得意の作り話だ。その作り話にペーネロペイアは涙する。

彼女はそれを聞き涙を流し肌は溶けんばかり、あたかも山の頂で雪が溶ける、それは西風が降らせ東風が溶かすもの、そして川はその雪溶け水で溢れ流れる、その如くに脇にいる自分の夫のために泣きながら彼女の美しい頬は流れる涙で溶けんばかりだった（『オデュッセイアー』第19歌 204～209）

涙を融雪に比している。

この一節、音韻を知るために原詩も掲げると、

τῆς δ' ἄρ' ἀκουούσης πᾶς δάκρυα, τῆκετο δὲ χυμός:

ὡς δὲ χιών κατατρίκετ' ἐν ἀκροπόλειον ὄρεσιν,
ἦν τ' Ἐῖρος κατέτρεξεν, ἐπὶν Ζέφυρος καταχευῆι:
τῆκομένης δ' ἄρα τῆς ποταμοὶ πλήθουσι βρονταί:
ὡς τῆς τῆκετο καλὰ παρῆια δάκρυ χεύοντις,
καίουσις ἐὼν ἀνόρα παρῆμενον.

であり「ε」音が響きわたっている。涙にうちしおれる様を思わせる音調である。「脇にいる自分の夫」に気づかずの涙であるだけに憐れを誘う。

C—f 黒雲

悲しみは端的に黒雲にも喻えられる。パトロクロスの死の報を聞いた瞬間のアキレウスだ。

そのように言った。すると彼を悲しみの黒い雲が蔽った
〔イーリアス〕第18歌22)

D. 死者を悼む

悲嘆の最大のもは死者に対する哀哭だろう。そこに焦点を当ててみよう。人は如何にして死者を哀哭するか。

D—a 哀哭の音頭をとる

哀哭することは真情でもあろうが同時に葬礼における重要な作法でもあった。その音頭をとるものがある。ヘクトールの死に対して妻アンドロマケー、母ヘカペー、義妹ヘレネーが次々に音頭をとる。

女たちの間で白き腕のアンドロマケーが嘆きの音頭を取った、殺戮者ヘクトールの頭を手にかき抱きながら〔イーリアス〕第24歌723・724)
次いで女たちの間でヘカペーが激しい嘆きの音頭を取った〔イーリアス〕第24歌747)
そして三番目に女たちの間でヘレネーが嘆きの音頭を取った〔イーリアス〕第24歌761)

D—b 呼びかける

死者に対する呼びかけである。
トロイアからの帰還に際しオデュッセウスの一隊は最初にキコネス人の町に立ち寄る。そこでの戦闘で多くの仲間を失うことになった。

私の両端反った船は先へと進まなかった、キコネス人達の手にかかって陸で殺された仲間達の一人一人の名を三度呼ばないうちは〔オデュッセイア〕第9歌64～66)

「名を三度呼ぶ」というのも死者に対する哀哭の作法であつたらうか。しかしホメーロスの詩篇の他の箇所では見られない。高津春繁はその訳書で『三度呼ぶ』のは、敵地で殞れて、埋葬の礼を与えられない仲間の魂を呼んで、故郷につれて帰り、そこで死者の体はないが、墓を建てて葬るためである」と註している。

D i c エルペーノールの葬礼

ホメーロスの詩篇では三人の葬礼の次第が語られている。最も簡略だが、しかし印象深いのは若者エルペーノールのそれだ。彼は酔つて屋上で眠りこけ、目覚めた時寝ぼけて転がり落ち命を落としたのだった。冥界に降ったオデュッセウスがそこで最初に出会つたのは死んだばかりのこの部下だった。

最初に仲間のエルペーノールの魂がやつてきた、まだ道なき大地に葬られていなかったからだ。我々は遺体をキルケーの館に喚かれもせず葬られもせぬまま残してきたのだ、他の仕事の忙しさに紛れて（『オデュッセイアー』第11歌51～54）

そこでエルペーノールはオデュッセウスに

私を喚かれもせず葬られもせぬままに後に残して立ち去ら

ないでください、あなたにとつてそれが神々の怒りのもととならないように（『オデュッセイアー』第11歌72・73）と懇願する。

そして冥界から戻つた時、オデュッセウスはそのエルペーノールの求めに応じ葬る。

我々は沢山の涙を流して悲しみつつ葬つた。死骸とその武器が焼けると、塚を築き、そこに墓石を曳いてきて（据え、墓の頂に釣り合いよき權を立てた（『オデュッセイアー』第12歌12～15）

ここには「涙する、焼く、塚を築く、墓標を立てる」と、しかるべき葬儀の次第が簡潔に述べられている。墓標として權を立てたのは死者が漕ぎ手であつたからだ。エルペーノールの霊が

塚には權を立てて下さい、生きていたとき私が仲間達と共にいてそれで船を漕いだ權を（『オデュッセイアー』第11歌78）

と言つて要望したのだった。いわば遺言だが、死して後の遺言だ。この遺言は『イーリアス』のパトロクロスの霊がアキレウ

スに残した遺言を想起させる。

その如くに我々二人の骨を同じ壺が納めてくれ、そなたの母御が下さった黄金の両耳のあの壺が（納めてくれ）（第

23歌91・92）

ここでもホメーロスの「壺」が主語となっている。

「權」も「壺」も死者の思い入れが籠もっている形見であるからか、いずれも印象深い。

D—d パトロクロスの葬礼

パトロクロスの葬礼は手厚いものだった。その次第は『イーリアス』第二十三歌で数百行に亘って詳述される。要点を列挙してみよう。

まず 髪を切る。

アキレウスは火葬するに際しこう言う。

「スベルケイオス河よ、父ペーレウスはあなたに空しく祈つたのだった、愛する父祖の地に私が帰還した時には、あなたに髪を切つて供え、百頭牛を犠牲にし、五十頭の雄羊をその場であなたの神域と香しい祭壇がある源の中へと生贄に捧げると、そのように老人は祈つたのだった。しかしあなたは彼の願いを成就してくれなかった。今や私は故郷に

帰還することはないのだから、勇士パトロクロスにこの髪を持っていくよう与えよう。」このように言つて髪を愛する友の手に置いた（『イーリアス』第23歌144～153）

ここではまず「髪を切る」という行為が祈願成就のときの「願ほどのき」の意味を持つていたことが触れられている。そしてその同じ行為に死者への「手向け」の意味をアキレウスは与えているようだ。

次いで火葬の段を作る。そこにアキレウスは馬を、犬を、そして十二人の捕虜を生贄に捧げる。

そこに蜂蜜とオリブ油との双耳甕を臥所に立てかけて置いた。大いに呻きながら、四頭の頸太き馬を追い立てて火の中へと投じた。殿には九匹の食卓に侍らせる犬がいたが、その内二匹を喉を掻いた上で火の中へと投じた。更に気性大きなトロイア人の十二人の貴い子をも、青銅で殺めて。悪しきことを心にたくらんだものだ。そして、焼き尽くせとばかり鋼の火の勢いの中に放つた（『イーリアス』第23歌第170～177）

「十二人の貴い子」までとなると、これは現代では人倫に悖るとして許されないだろう。「悪しきことを心にたくらんだも

のだ」とは詩人も自ら語りつづいたたまれなかったのであるうか。しかし、『オデュッセイア』にも同様の例があつたことに気づく。これは弔いのための犠牲ではなく懲罰としてだが、女召使い達（やはり十二人！）が不義を働いた廉でオデュッセウスとテレマコスによつて首くりに処せられる。

その如くに女達は一列に頭を差し出し、皆の頸には環繩がかけられた、惨めを極めてに死ぬようと。女達は足で一時間掻いたがそれも長くはなかつた（『オデュッセイア』第22歌471〜473）

不義不忠とはいへ無抵抗の女を「惨めを極めてに死ぬようと」と *ὄνος οἰκτοῖα θάνοειν* とは、やはり現代の感覚では律しきれないところがある。

このようにして火葬を終えようとパトロクロスの死を悼んだ葬送競技を催す。

競馬、拳闘、相撲、徒競走、槍術、鉄塊投げ、弓術の諸競技が行われる。哀悼の催しなのだが、そこは勇み立つもののふ達の昂奮の世界であり哀哭はない。葬送競技は哀哭からもののふの日常への復帰をもたらす。

Die ヘクトールの葬礼

『イーリアス』最終歌、最後の一節ではヘクトールの葬礼が行われる。アキレウスはプリアモスとの対面で最後に「ヘクトールを葬るのに何日間要するか」と問う。プリアモスは「十一日間。十二日目には我々は戦いましょう、やむを得ないならば」と応える。そこでアキレウスは

プリアモスよ、そなたが仰るように致しましょう、お望みの間戦闘を控えましょう（『イーリアス』第24歌669・670）

と保証したのだった。

さてヘクトールの葬礼の次第はこう語られる。

まず薪を集める。

彼らは馬と騾馬を車に繋ぎ、速やかに町の前に集まつた。

九日間にわたつて彼らは限りなく多くの薪を集めた（『イーリアス』第24歌782〜784）

リ阿斯」第24歌782〜784）

そして火葬する。

しかし十日目に人を照らす曙が現れた時、その時勇敢なヘクトールを涙を流しつつ運び出し、薪の一番上にその屍を置いた。そして火を放つた（『イーリアス』第24歌785〜

葡萄酒で火を消す。

彼らが一所に集合し終わると、まず火勢が覆ったところ全
ての火を燦めく葡萄酒で消した（『イーリアス』第24歌790

～792）

骨を拾い、納める

そして、兄弟達や仲間達が泣きながら白い骨を集めた、頬
からは大粒の涙を流した。そして紫の柔らかな布で包んだ
黄金の壺の中に拾った骨を納めた（『イーリアス』第24歌

793～796）

埋めて塚を築く

直ちにうつろな墓穴に入れ、上にはぎっしりと大きな石を
敷き詰め、速やかに塚を築いた（『イーリアス』第24歌797

～799）

そして宴する。

そして皆一同に会し、ゼウスの育てるプリアモス王の館で
誉れ高い宴を開いた。この如くに馬を馴らすヘクトール
の葬礼を執り行ったのだった（『イーリアス』第24歌802～

804）

この『イーリアス』全篇の最後、ヘクトールの葬礼の一節に
は静けさが領している。

最終行は

この如くに馬を馴らすヘクトールの葬礼を執り行ったのだつ
た

ὄσ' οἱ γ' ἀφιέρον τάφον Ἑκτορος ἱεροδύσιοι.

であり、詩篇の声も遠ざかっていくようだ、○○の余韻を残して。

D *i* *f* 故人を追憶して泣く

この項ではこれまで葬礼の場面を見てきたが、人は愛しい人
を喪ったその現在にのみ涙するのではない。形見に、あるいは
形見の言葉を思い出して泣くことがある。アンドロマケーはヘ
クトールの葬礼の前、ヘクトールの屍にこういう言葉を投げか
けている。

あなたは死ぬときに臥所から手を差し伸べて私に心深い言

葉を言つて下さらなかつた、その言葉を夜となく昼となく常に涙ながらに思い出したことでしょうに（『イーリアス』第24歌744・745）

それは「心深い言葉 *rukovoy etos*」でありそこには悲痛な中に甘美さも混じっている。形見とはそういうものである。そのような形見さえ失われたアンドロマケーの悲しみは一層深い。

E. 泣く男

ホメーロスの世界で女性は勿論泣く。しかし多くの男共も泣く。

E-1a 泣くアキレウス

「はじめに」でも触れたが、『イーリアス』第一歌早々に涙するアキレウスが出てくる。こう母テティスに訴える場面だ。

母よ、私を短命な者として産んだからには、オリュンポスの高く轟くゼウスはせめて誉れを私に与えて下さつてもよいはずなのに。それが今少しも私の名誉を考えて下さらぬ。というのもアトレウスの子広く治めるアガ멤ノーンが私を侮辱したからです、自らの手で私の報償を奪い取つて

（『イーリアス』第一歌352～356）

これは涙を流しながらの訴えだった。

このように涙を流しつつ言った。それを母御は海の底の老父の傍で坐して聞いた。灰色の海から霧の如くに速やかに立ちのぼり、涙を流している彼の前に座った。手で彼を撫で名を呼んで言うには「我が子よ何故泣くのです、どんな悲しみがあなたの心に來たのです。言つてご覧なさい、胸に隠さないで、私たち二人共分かるように」（『イーリアス』第1歌357～363）

これはとても猛者の像とは思えない。アカイア勢第一の勇将の名がそれこそ「泣く」。当時の聴衆は戸惑わなかつたのだろうか。

「男泣き」という言葉がある。普段泣かないはずの男が堪え切れずに嗚咽する場合を言う。ホメーロスの世界で他の武将も泣かないわけではない。アガ멤ノーン、パトロクロス、アンティロコス、オデュッセウス等々などにも泣く場面がある。それらはあるいは戦況を悲観し、あるいは味方を喪い、あるいは思い出や望郷の念に浸つてであつたりだ。アキレウスの涙にしても詩篇後半に起こる僚友パトロクロスの死に際してのものはそれらと同じ範疇だ。しかしこの第一歌でのアキレウスの涙は「男泣き」とは言い難い。苛められたことを母親に訴える甘えん坊さながらなのだから。

いやむしろ敢えてそう描いていると考えるべきかも知れない。すなわちここで詩人は母子の関係の一つの範型を描こうとしているのではなからうか。「手で撫で *yepti karapashu*」までされている。「我が子よ *tekov* (これは「坊や」とでも訳した方がいいかもしれない)」の呼びかけや「言つて」*skazhda* (これも「泣いてばかりいたら分らないでしょう」とでもいわんばかり)の言葉遣いなど、これらはまさに愛子に対する母親の姿だ。猛者も母親にとっては愛子であった。

E—b 泣くテレーマコス

あたかも上記『イーリアス』のアキレウスに対応するかのようには『オデュッセイアー』の始めの方、第二歌で泣くテレーマコスが出てくる。集会で市民達に館での求婚者の横暴振りを訴えたときだ。

怒りに任せてこう言った。そして涙を溢れさせながら錫杖を地面に投げつけた (『オデュッセイアー』第2歌 80・81)

これはどういう涙だろうか。二十歳そこそこの若者が集会で大勢の前に、恐らくは初めて演説する。しかもその大勢の中には当の求婚者達が陣取っている。心の昂ぶりを抑えきれなかつたのであろう。若い男にはこういう涙もある。

E—c 老父の悲嘆

ホメーロスの詩篇では「老い」のテーマが繰り返し現れている。老境にある父親にとって最大の嘆きの種は戦場に送り出した息子の命運だ。

ペーレウス

詩篇の前面に出ることなく遠く故郷で悲嘆しているのがアキレウスの老父ペーレウスだ。

その老ペーレウスの像がアキレウスの言葉で語られる。

彼は今プテイーエーで優しい涙を流している、身の毛もよだつヘレネーのために異国でトロイア勢と戦っているこのような息子の私を偲んで (『イーリアス』第19歌 323～325)

そしてその息子の死をほとんど予見もしている。

というのもペーレウスはとつと死んでしまっているか、辛うじて生きていても、憎むべき老いに、そして息子の死を報じる残酷な知らせを今にも届くかと待ち受けて、悲しみに沈んでいるだろうと思うからだ (『イーリアス』第19歌 334～337)

プリアモス

老王プリアモスは死地に赴こうとする（すなわちアキレウスを一人迎え撃とうとする）息子ヘクトールを見て悲嘆する。

老人は呻き手を振り上げて頭を叩いた、そして呻きつつ大声で叫んだ（『イーリアス』第22歌33・34）

死地へと逸る息子を引き留めようとしたがかなわない。

老人は言った。手で白髪を掴んで頭から引き抜いた。しかしヘクトールの心を説き伏せ得なかった（『イーリアス』第22歌77・78）

そして終に息子の死の現実を前に更に悲嘆する。

（プリアモスは）マントで身体をすっぼりとくるんでいた。その老人の頭と首の周りには汚物がべつとりと付いていた、それはふしまるんで自らの手で塗りつけた汚物だ（『イーリアス』第24歌163～165）

ラーエルテース

老父ラーエルテースも帰還ならぬ息子オデュッセウスの命運に悲嘆している。

その様は豚飼の口からこう語られる。

ラーエルテース様はまだ生きておいでです、そしてご自身の家で手足から命が尽きるようにと常にゼウスに祈っておられます。出て行った我が子をお嘆きのあまりに（『オデュッセイア』第15歌353～355）

そして先にも引用した、息子オデュッセウス死すと思ひこんだ場面はこうだった。

このように言った。すると彼を悲しみの黒い雲が覆った。彼は黒ずんだ灰を両手で掴み激しく呻きながら白髪の頭から被った（『オデュッセイア』第24歌315～317）

これら三人の老父の姿を並べてみるとそこには共通点と相違点とが浮かび上がってくる。共通点は言うまでもなく、息子の命運を嘆く父親の姿だ。一方の相違点は物語への登場の仕方だ。ペーレウスは物語の背景に隠れている、アキレウスの思いの中でのみ現れる。プリアモスは物語の前面に出ており主要登場人物の一人でさえある。ラーエルテースはいわばその中間、隠棲する姿が時折他の登場人物によって言及される、そして最終歌で初めて前面に登場する。『イーリアス』におけるペーレウスとプリアモスを『オデュッセイア』におけるラーエルテース像

が統合しているとも言えようか。

E—d 男の泣き声、女の泣き声

ホメーロスでは男の「泣く」と女の「泣く」とで語を使い分けている場合がある。その対比が明らかに現れている一節がある。

その如くに彼（ヘクトール）の頭はすっかり砂まみれになつた、母親（ヘカベ）は髪を毛を引きむしり艶やかな被り物を遠くに投げ、我が子を見やうと大声で泣きじゃくつた *kúkusev*、愛する父親（プリアモス）は痛ましく呻き *q̄iud̄zev*、それを聞いて市中の人々は泣きじやくり *kukut̄q̄* と呻き *oiuoȳi* に捉えられた（『イーリアス』第22歌 405～409）

女親には *kúkusev*、男親には *q̄iud̄zev* を使っている。

kúkusev およびその関連語はホメーロスに十例余りある。その主体の性別が明らかかなものは全て女性である。一方、*q̄iud̄zev* およびその関連語はホメーロスに十数例ある。そしてやはり、その主体の性別が明らかかなものは全て男性である。この *q̄iud̄zev*（およびその関連語）は戦闘において負傷した将兵の発する声に使われている例が多い。これも男の声なればこそだ。

引用文最終行の *kukut̄q̄* (*kúkusev* の関連語)、*oiuoȳi* (*q̄iud̄zev* の関連語) は、市民全体が主語であるので泣

き声の主体が男女どちらであるか明示されているわけではないが、前者は女達、後者は男達と見るのが自然だろう。〔註9〕

F. 悲嘆と食事

悲嘆と食事は仇敵であるようだ。

F—a 食事の拒否

悲嘆のあまり食事をうけつけないことがある。食べることは生きるための基本的要件だ。それをうけつけないということは、無意識的に死への衝動が働いているのであろうか。死せる僚友パトロクロスを前にアキレウスは食事を摂らうとしない。

ゼウスがプリアモスの子ヘクトールに誉れを与えたもうた時に彼が斃した者達が切り裂かれて横たわっている、その今そなた達は食事へと促し立てる。いや私は、今は食事も摂らず空腹のままに戦うよう、そして陽が落ちて我々が恥辱を注いだ後に盛大な食事を準備しよう命じたい（『イーリアス』第19歌 203～208）

ここまではアカイア全体のこととして述べている。しかし以下はより切実な自らのこととして述べる。

その前には、我が僚友が死んでいるというのに、食事が私の喉を通ることはないだろう。その仲間は鋭い青銅で切り裂かれて戸口に向けられて横たわっている、その周りでは仲間達が嘆いている。それ故そんなことは私の心にはない、あるのは殺戮と血ともものふ其の苦しい呻きだ（『イーリアス』第19歌209～214）

「戸口に向けられて横たわっている」について古注は、葬礼前に死者の足を外に向けて寝かせる風習があった、そしてそれは再び帰ってくることはないこと示していたと伝えている。この詩句にもアキレウスの無念が込められているようだ。

F1b 食事の拒否の否定

しかしまた逆に、食事の拒否を諫める言葉もある。オデュッセウスがアキレウスに対して言う。

アカイア人は胃袋によって死者を悼むことなどは出来ない。全く沢山の者が日々ひつきりなしに斃れていくのだ、いつ苦勞の絶え間があるであろうか。いや死者は葬らねばならぬのだ、非情なる心をもって、一日涙した上で。憎むべき戦を生き残った者は飲食を思わねばならぬ、敵の者共と一層激しくあくまで戦い続けるために（『イーリアス』第19

歌225～232）

「胃袋によって死者を悼むことなどは出来ない
 γαστήρι δ' οὐ φαίεσσι τέκνον τέθηθα」は至言だし、「いや死者は葬らねばならぬのだ、非情なる心をもって、一日涙した上で ἀλλὰ κρηὶ τὸν μὲν καταδύειν ὄς κε θάψῃται / ψυχὰ θυμὸν ἔχοντα ἐν ἡμῖν δακρυόεντα」は金言だ。流石智の人オデュッセウスの言葉ではある。しかしアキレウスは、オデュッセウスのこの言葉にも又長老達の懇願にも聞く耳を持たず、食事を頑なに拒否するのだった。^{註10)}

F1c ニオベーの物語

悲嘆と食事について究極の話としてニオベーの物語がある。それは『イーリアス』の大団円でアキレウスの口から語られる。アキレウスはプリアモスにヘクトールの遺体返還に応じた後こう語る。

今は食事に心を向けましょう、というのも髪麗しきニオベーでさえ食事に心に向けたのですから。彼女の十二人の子供は館で殺されました、六人の娘と六人の若い盛りの息子がです。ニオベーに怒って、息子らはアポロンが銀弓で殺め、娘らは矢を射るアルテミスが殺めたのです。それは（ニオベーが）頰美しきレートーに自らを比したからでした。レートーは二人産んだが自分は大勢産んだと言って。それ故そのたった二人が大勢を殺したのです。彼らは九日間殺戮の

場に横たわったままで、誰も葬る者がいませんでした、人々をクロノスの御子が石にしたからです。十日目になって彼らを空に住まいする神々が葬りました。そしてニオベーは食事に心を向けました、涙することに疲れたので。……

さあご老体、我々も食事のことを思いましょう。その後で愛しい息子をイーリオンに連れて行き哀泣されるがよい、さぞかし多くの涙が流されることでしょう（『イーリアス』

第24歌601～620）

この物語を語るのはアキレウスだ。僚友パトロクロスの死を悲嘆しあれほど頑なに食事を拒否したアキレウス本人である。激情型アキレウスもここでは賢者となっている。

無論悲しみが尽きたわけではない。悲しみを抱きながら食事する、そのことは人間が悲しみに耐えつつ生きていく宿命にあることを象徴している。

G. 泣くことの欲求とその終息

G—a 泣くことの欲求

「泣くことの欲求」とは逆説的表現だがホメーロスに類出する。テティスはパトロクロスの死に際してその仲間達に「泣くことの欲求」を起こす。

テティスは彼らに泣くことの欲求を掻き立てた。涙に砂は濡れ者共の武器は濡れた。潰走の引き起こし手をそれほど惚んだのだ（『イーリアス』第23歌14～16）

少し先で、アキレウスは夢見に立ったパトロクロスの霊のことを仲間達に語る。その時同様の表現が来る。

このように言った。そして皆に泣くことの欲求を掻き立てた（『イーリアス』第23歌108）

『オデュッセイアー』にもある。オデュッセウスとテーレマコスとが父子の再会を果たしたときだった。

二人に泣くことの欲求が掻き立てられた（『オデュッセイアー』第16歌215）

これらいずれも *ἔπος*（欲求）という語が使われている。この *ἔπος* は愛欲や食欲に使われることが多い語だ。泣くことも欲の対象となりうるのだろうか。確かに「泣きたくなる」とはある。そして、泣いていて泣くことが一種の快感で泣き続けることはあるようだ。

G—b 泣くことの満足

アキレウスは夢見に立ったパトロクロスの亡霊にこう語りかける。

さあ近くに寄れ、たとえ東の間であっても抱き合つて互いに痛ましい嘆きを満足させよう (『イーリアス』第23歌 97・98)

但しここでは「嘆きを満足させよう、満足するまで嘆こう」であつて満足を果たしたわけではない。実際パトロクロスの霊はこの直後、アキレウスと抱き合うまもなく「キイキイと泣いて地下に去つた」のだった。しかしこういう例がある。

彼女は涙多き嘆きに満足すると再び彼に伝えて言った (『オデュッセイアー』第19歌213・214)

彼女は涙多き嘆きに満足すると思ひ上がった求婚者達の広い広間へと行った (『オデュッセイアー』第21歌57・58)

「満足する」のはいずれもペーネロペイアだ。満足によつて嘆きの休止が生ずる。その休止の間、前者ではオデュッセウス(扮する乞食)に弓競技実施の考えを語り、後者では弓競技の場たる広間に向かう、いずれも何らかの行動に出ている。勿論

それで嘆きが尽きたわけではない。完全に嘆きが終息するには第二十三歌まで待たねばならない。それはあくまで一時の小休止であつた。

「満足した」と訳語をあてたこの *τηρόμενος* はやはり愛欲や食欲に使われることが多い語である。愛欲や食欲の場合においても満足は一時のことだ。「嘆き」の満足もそうなのであろう。

「*τήρομαι* (満足した)」に代えて「*τίθημι* (放つた)」, そして「*ἔπος* (欲求)」に代えて「*ἔπος* (欲望)」を用いたこういう一節もある。

青銅の鎧のアカイア勢の船端で死すべき *τέθνηκεν* you 運命になろうとも望むところだ。というのもアキレウスはすぐにも私を殺すだろうからだ、私が息子を胸に抱いて悲嘆の *you* 欲望 *ἔπος* を放つた *τίθημι* 後で (『イーリアス』第24歌224〜227)

プリアモスが息子の遺体を乞い受けるべくアキレウスのもとに赴く決意を語る場面だ。悲嘆の欲望を果たしたときに自らの死を覚悟している。ここには「悲嘆 *λύω*」があり「欲 *ἔπος*」がありそして「死 *θάνατος*」がある。人間の根源的なものが崇高なまでに凝縮している。

G | c 泣くに飽きる

満足の後には「飽きκόπος」だ。

メネラーオスの語る中にこの言葉がある。

ある時は嘆きに心を満足させ、またある時は嘆きを止める、
胸を凍らせる嘆きの飽きは早いもの故（『オデュッセイ
アー』第4歌102・103）

ペーネロペイアについてさえこう言われる。

泣いて心に飽いた後で（『オデュッセイアー』第20歌59）

「飽きκόπος」についてはこのような詩行もあった。

全ての事に飽きがある、眠りにも、色事にも、甘い歌にも、
楽しい踊りにも（『イーリアス』第13歌636・637）

「全ての事に飽きがある」、嘆きも例外でないということだろ
うか。

G | d 涙することに疲れる

飽きるのみではない、疲れることもある。泣くのが運動であ
りエネルギーを消費する行為であることは赤ん坊を見ても分かる。

食事に心を向けました、涙を流していて疲れたので（『イ
ーリアス』第24歌613）

先に引いたアキレウス語るところの二オペーの物語にあった
詩行である。^{〔註11〕}

H | 泣く時の感覚・感情・意識そして夢

泣く時にはどのような感覚や感情、意識が、起こり働いてい
るのだろうか。この点についても詩人は鋭い観察をしそれを鮮
やかに描写している。

H | a 「鼻を鋭い力が貫く」

先ず感覚についてはこのような詩行がある。

彼の心は掻き立てられた。愛する父を見るなり彼の鼻を鋭
い力が貫いた（『オデュッセイアー』第24歌318～319）

主語の「彼」はオデュッセウスだ。老父ラーエルトースが息
子死すと思ひこんで嘆き悲しみ、頭に灰を被る姿を見た時だっ
た。^{〔註12〕}

H—b 泣き笑い

「泣き笑い」、これはどのような感情だろうか。ヘクトールとアンドロマケーとの最後の別れの場面に次の詩句がある。

δακρῶν ἑλάσσονα 涙ながらに笑いながら

アス』第6歌84)

死を覚悟したヘクトールが幼子アスチュアナクスに別れの抱擁をしようとする。幼子は父の兜の房を見て恐れ仰け反って泣く。父母はそれを見て笑い転げる。ヘクトールは兜を措きあらためて子を抱擁し、その子をおアンドロマケーに返したのだった。アンドロマケーは「涙ながらに笑いながらδακρῶν ἑλάσσονα」受け取る。哀切を極めた人間の感情が珠玉の表現を得ている。

H—c 「涙を流している彼を足が運ぶ」

『イーリアス』には「足が(人)を運ぶ」という一風変わった表現が何回か出てくる。「(人が)歩いた」もしくは「(人が)歩を進めた」といわずにである。その中に涙する人を運ぶ例がある。パトロクロスが討たれ、その悲報を知らせようとアキレウスのもとに泣きながら向うアンティロコスに「足が運ぶ」。

涙を流している彼を足が戦いから運んで行った

アス』第17歌700)

「足が(人)を運ぶ ποδὸν ἄρῶν」の表現が使われているその他の例も、その人が何かの思いに囚われているとき、あるいは戦鬪で憔悴したりあるいは逆に自らの雄姿に酔ったりしている時、いずれも心ここにあらずのくだりである。涙する人の心もやはりここにはない。ここでは意識は起こっても働いていない、消え去っている。

H—d 夢で泣く

意識の有無という観点で言うと、夢の中で泣くときはどのようなのだろうか。

ペーネロペイアの心は帰還せぬオデュッセウスへの思いと再婚との間で揺れ動いている。その彼女がオデュッセウス扮する老乞食に自分の見た夢について語る一節がある。

二十羽の鷺鳥が屋敷にいて水から小麦を啄んでいます、それを眺めて私は楽しんでます

19歌537・538)

そこに鷺がやって来て鷺鳥皆の首をへし折って殺してしまおう、そこで、

私は夢の中ながら泣きしゃくり上げていました。髪麗しいアカイアの女達が私の周りに集まりました、鷺が鷺鳥を殺

「罌粟の実の如くに φη κωδῆσαι」掲げてペーネレオースが言い放った言葉はこうだった。

トロイア人達よ伝えてくれ、誇り高きイーリオネースの、愛しい父と母とに館で嘆くようにと。アレゲーノールの子プロマコスの奥方も、トロイアから船と共に我らアカイアの若者達が帰還するときに、愛しい夫が帰って来たのを迎えて喜ぶことはならぬのだから（『イーリアス』第14歌501～505）

多くの人名が輻輳しているので少し解説すると、イーリオネースはペーネレオースによって今殺され（罌粟の実の如くに）首を掲げられ）たトロイア方の兵士、プロマコスはその直前に殺されたアカイア方の兵士。イーリオネースに「愛しい父母 πατρι φιλῶν καὶ μητρῶν」がいる、プロマコスに「愛しい父母母を「愛しい夫 ἀγαπῶν φίλου」とする奥方がいるように。

非情な言辞である。しかしそれは戦い自体が持つ非情さだ。

Ⅰ—b 各人の悲しみを泣く

パトロクロスの遺体を前にプリセイイスが悲嘆する場面がある。自分の三人の兄弟は戦死し、夫はアキレウスの手で殺された。パトロクロスあなたは、私に泣いていることを許さずそのアキレウスの正妻にしてやると言ってくださっていたのに、と。

これ自体「プリセイイスの悲嘆の物語」になりそう。しかしここで着目したのはそれに続く詩行だ。

そのように泣きながら言った。女達は、パトロクロスを口実にして、それぞれの苦しみを嘆いた（『イーリアス』第19歌301・302）

またこのような場面もある。アキレウスが故郷に残した老友ペーレウスを思いやって嘆いた時である。

このように泣きながら言った。それにつれて長老たちはそれぞれが館に残してきた者を思い出して嘆いた（第19歌338・339）

人は皆それぞれの悲しみを抱いている。人は他人の悲しみを泣く時自らの悲しみをも泣いている。

Ⅰ—c 共有する悲しみ

他人の悲しみと自らの悲しみがそれぞれでありつつ共通のものであることがある。そこには悲しみにおける一種の連帯の感情、共苦の世界がある。そのあり様を詩人は深い共感をこめて描いている。

『イーリアス』最終歌で、プリアモスは息子ヘクトールの遺

体を乞い受けんとしてアキレウスの下に赴く。アキレウスと対面するとプリアモスは嘆願しつつかう言う。

神の如きアキレウスよ、そなたの父上を思い起こしてくだされ、私と同じく年取って、忌まわしい老いの鬩にいる父上を。……アキレウスよ、神々を畏れ、そなたの父上を思い起こしてこの私を憐れんでくれ。私は一層憐れな者です、他の死すべき人間が誰も忍び得なかつたこと、我が子を殺した男の手に口を差出すことを忍んだのです（『イーリアス』第24歌486〜506）

そうするとアキレウスの心は揺すぶられる。

このように言った。そして彼アキレウスに父を思つて泣くことの欲望を掻き立てた。彼は手を取つて老人を静かに押しやつた。二人は思い起こし τὰ δὲ ἠνθοπέτην、一方はもののふの殺し手ヘクトールを思い起こしアキレウスの足下に倒れ込んで激しく泣き、アキレウスの方は我が父のために泣き、又ひるがえつてパトロクロスのために泣いた。彼らの泣き声は家中に響きわたつた（『イーリアス』第24歌507〜512）

「二人は思い起こし τὰ δὲ ἠνθοπέτην」の双数表現が共有する

悲しみ、共苦を雄弁に語っている。

おわりに

この小論は表題を「ホメーロスの涙」としたが、本来は「ホメーロスの詩篇における悲しみ」とでもすべきところだとの指摘をうけそうだ。ここで「ホメーロスの涙」と題した趣旨を説明しておきたい。そこには、表題は簡潔なものでありたいとの気持ち働いていることも事実だが、それに加えて多少の理屈もある。

まず、「涙」は「悲しみ」の最も端的な表現であることはいわずもがなであり、「涙」で「悲しみ」を代表させることは許されるだろう。そしてまた、詩人歌うところの悲しみは詩人が感じた悲しみ、すなわち詩人自身が抱いた悲しみか、あるいは他人のものであつても詩人が共感した悲しみに他ならないはずだ。であつてみればそれを「ホメーロスの涙」と題することもあながち的外れではなからう。

さて、この小論の「はじめに」で三つの問いを立てた。すなわち

1. ホメーロスにおいてその悲しみの内容や現れ方、捉え方はどのようだろうか。

2. そしてそれは現代の我々の悲しみの場合と共通するのだろうか、相違するところがあるのだろうか。
3. 詩人は何故これほどまでに悲しみを歌ったのだろうか。

この内1については上記本文でつぶさに見てきたところだ。実に多様な悲しみが描かれていた。至るところに悲しみがあり、その中には詩人が特に共感したのである。自らと他者が悲しみを共にする姿もあった。

2の我々の悲しみとの相違については、確かに若干の違いがあるのだがそれはいわば「ずれ」であり、理解しがたいものはほとんどなかった。むしろ驚くほど共通していた。我々が意識していなかったり言葉にしていなかった、しかし我々が感じていた悲しみの側面が捉えられ表現されている詩行にも多く出会った。「ホメーロスの涙」は「我々の涙」でもあった。

最後に三つ目の問い「詩人は何故これほどまでに悲しみを歌ったのだろうか」をあらためて問うてみたい。

この三つ目の問の答は一つ目と二つ目のそれから繋がっているようだ。

土井晩翠は『イーリアス』訳跋文に愛娘と愛息、いずれをも若くして相次いで亡くしたことに触れている。恐らくはプリアモスの悲しみに自らの悲しみを重ねたのだろう。その共鳴の深さが本邦初の韻文原典訳を成し遂げせしめたのだと思われ

る。^{〔註13〕}

今ここに一人の若者がいたとする。その若者が死期の迫った親を見舞いに病院に行く。面会時間になるのを待って病院敷地の池の端かどこかで『イーリアス』を読む。丁度第二十二歌のヘクトールの遺体が地面を引きずられるあの場面にさしかかるところだ。

その如くに彼（ヘクトール）の頭はすっかり砂まみれになった、母親（ヘカベ）は髪の毛を引きむしり艶やかな被り物を遠くに投げ、我が子を見やうて大声で泣きじゃくった。愛する父親（プリアモス）も痛ましく呻いた（『イーリアス』第22歌405〜408）

近くのICUの病床では様々な管を付けられて親が臥している。欠点もあり人並みの悪いこともあるいはしることがあったかも知れないが、それほどの悪人とも思われぬ、親として社会人としてそれなりに真面目に生きた人間だ。人生の最後近くで何故このような苦しみを与えられねばならないのか。

かたや叙事詩の登場人物、こちらは現代の若者、かたや父母の子に対する情、こちらは子の親に対する情、かたや戦場、こちらは病院、置かれた状況は相違しあるいはかけ離れているのだが、この時ヘクトールの父母の悲しみは今の若者自身の悲しみとかぶさり、共振して止むことがないのではなからうか。

悲しみに満ちているのはホメーロスの詩篇の中だけではない。この人間世界そのものが悲しみに満ちている。ゼウスが洩らす言葉に次の詩句がある。

というのも人間ほどに哀れなものはどこにもないのだから、
地上で息をし這い回っている全てのものの中で（『イーリアス』第17歌46・47）

死の悲しみ、別れの悲しみ、諸々の苦難や不幸がもたらす悲しみ……。まさしく悲しみに呻吟しつつ息をし這い回っている。この悲しみは不条理である。しかし同時にその悲しみの高貴さを湛え神々しい（オリュンポスの神々にこの悲しみの深さ故の神々しさはない）。詩人はこの事実を驚嘆し、両詩篇を通じてこう問うているのではなからうか、「世界は何故これほどの悲しみ、神々しいまでの悲しみに満ちているのか」と。

註

【1】 詩人は「怒り」についても、又「笑い」についても、並々ならぬ関心を示し深い洞察を加えている。筆者はホメーロスの詩篇における「怒り」と「笑い」それぞれについて若干の考察を試みたことがある。「イーリアス」における怒り・

再考）（明治学院大学『言語文化』第30号）、「笑いから見たホメーロス」（同第31号）

【2】 日本の和歌以来の伝統では多く「袖」が登場する。

つれづれのながめにまさる涙川袖のみ濡れて逢ふよし
もなし（古今集、藤原敏行）

「御所中の女房たち、皆袖をぞぬらされける」（平家物語「月見」）

「供奉の公卿・殿上人：皆袖をぞしほられける」（平家物語「大原御幸」）

「袂」もあつた。
紅のふりいでつつなく涙には 袂のみこそ色まさりけれ（古今集、紀貫之）

【3】 「平家物語」には「鎧の袖」がある。

「守護の武士どもも、みな鎧の袖をぞ濡らしける。」（平家物語「成親流罪」）

【4】 平安朝文学では「枕が浮く」がある。

独り寝の床にたまれる涙には石の枕も浮きぬべらなり（古今六帖五）

涙落つとも覚えぬに、枕浮くばかりになりけり（源氏物語、須磨）

改めて読み直して見ると「枕が浮く」とは甚だしい誇張表現だ。

【5】 しかし法隆寺五重塔の「涅槃像土」には釈迦入滅に際し胸を叩いて悲嘆する弟子の姿が見られる。ただこれは、日本固有のものでなく天竺（インド）の風習を引き写したものである可能性もあろうが。

【6】 日本語では「膝を打つ」という。正確には腿を打っているので、仕事としてはホメーロスの「腿を叩く」に同じだ。しかしそこに込められた意味はというと、ホメーロスの「腿を叩く」が悲嘆の仕事であるのに対して、日本の「膝を打つ」は気づきや感心の仕事である場合が多い。もともと日本でも「悲嘆とまでは行かないにしても」「しまった」と失敗に気づいた時に「膝を打つ」こともある。その点では通ずるところがあるともいえる。

【7】 戦場で「敵の」膝を崩す *tyōvavara lūvewi* といえば「殺す」ことであつた。また、嘆願する時には相手の「膝 *tyōvu*」に取り付く。Chantaine の *Dictionnaire étymologique de la langue grecque* には、*tyivovai* 「生まれる」や *tyivōvōka* 「認知する」の語と *tyōvu* 「膝」との関連を探る興味深い推論が（定説としてではないもの）紹介されている。Chantaine の前掲書では *tyōvōv* (夜鶯) と *tyōvōva* (歌う) との関連性について、「おそらくある *probable*」としている。呉茂一はその説に拠つてであろうか、*tyōvōv* に「歌鶯」との訳語をあてている。

なお、万葉集に歌われる「ぬえ(鶴)鳥」は「夜鶯」や「ナインゲール」と解される *tyōvōv* と近い鳥であつたのかも知れない。

ひさかたの天の川原にぬえ鳥のうら泣きましつすべな
 きまでに(柿本人麻呂歌集所出歌 卷十一 一九九七)
 よしえやし直ならずともぬえ鳥のうら泣き居りと告げ
 む子もがも(柿本人麻呂 卷十一 二〇三二)
 万葉人が「ぬえ鳥」の声音に聴き取つていた情調には *tyōvōv* のそれと近いものが感じられる。

【9】 *oiōvōv* の語について Chantaine の前掲書では、語頭の *oi* は「苦痛や苦悩を表すオノマトペである」としている。 *kokorōv* の方については Chantaine にオノマトペであるか否かの言及はない。しかし *oiōvōv* からは男の呻き声、 *kokorōv* からは女の泣きじやくる声が聞こえてくるような気がするのは心なしであろうか。

【10】 本文で直訳的に「非情なる心をもつて」と訳した *vñka tyōvōv tyōvōv* の詩句を三人の和訳者(呉、高津、松平)はいずれも「心を鬼にして」と意識している。なるほどそのニュアンスだ。このように対応する表現が定型句的に存在するということは、ホメーロス世界の心性と日本古来の心性との間に通じるものが「ここにもあること」の証左であろう。

【11】 日本語に「泣き疲れる」という表現がある。これはまさに本文引用の *kāyio dāvōv tyōvōva* (涙を流していて疲れる)にあたる。

【12】 「鼻を鋭い力が貫く *pvavōv dōvōv mēvōv pvōvōvōv*」は日本語の「鼻の奥がツンとする」を想起させる。表現は異なるが感覚は同じだ。こういう根源的身体感覚は人間である限り古今東西不変であるようだ。ホメーロスにおける「鋭い力」という分析的表現が「ツン」という日本語特有の擬態語表現となっている。

【13】 『イリアス』土井晩翠訳 富山房 一九四〇年